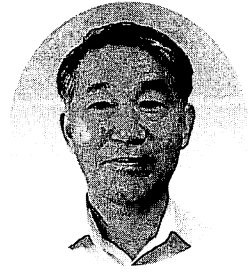


琉球大学学術リポジトリ

[巻頭言] バイオマスはわれわれに朗報をもたらすか？

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上野, 正実, Ueno, Masami メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015677

バイオマスはわれわれに 朗報をもたらすか？



上野正実

Masami Ueno: Biomass brings us good news?

ゴア元アメリカ副大統領2007年度ノーベル平和賞に決定！というニュースは驚きと歓迎をもって世界を駆け巡った。温暖化はのっぴきならない段階に突入しており、世界をあげてその対策に取り組まねばならないという強力かつ効果的なメッセージである。最近の異常気象にはびっくりさせられるが、異常が次第に常態化しつつある感がある。関連して、原油価格が1バレル90ドルを突破し、エネルギー問題も新たな局面を迎えている。これらの問題に効果的に対処できなければ、22世紀はないのかも知れない。杞憂と笑い飛ばせないものがある。

ポスト京都議定書を巡る動きが活発化している一方、京都議定書自体の履行期限が迫っている。その中で、バイオマスを利用した温暖化対策の骨子「バイオマス・ニッポン総合戦略（平成14年）」も昨年（平成18年）3月にリニューアルした。そこでは国産バイオ燃料の拡大が強く打ち出された。これに関連して、わずか30kLしかない現在の生産量を2030年までに600万kLまで増産する計画がたてられた。この大胆な数値目標によって、それまで潜伏していた企業などの興味が一気に動き出した。宮古島と伊江島でバイオエタノール実証事業を推進している沖縄は、この方面の先進地域である。他府県に比べて優位に事業を展開できる可能性をもっている。

沖縄のエタノール事業は糖蜜を利用している。周知のように、沖縄のサトウキビは長期的な減産傾向に加え、本年度から導入される新価格制度（経営安定化対策）によって、従来の生産システムを大きく変えざるを得ない状態に置かれている。まさしく正念場である。このような厳しい状態を脱却もしくは緩和するために、バイオエタノールもしくはバイオマスが効果的に利用できないだろうか。糖蜜のエタノール化は、廃液の処理など様々な問題もあるが、農業振興の観点から捉える姿勢が望まれる。5年後、10年後さらには20年後を見据えた方向性を見出す必要がある。現状では、糖蜜もしくは蔗汁のエタノール化が中心であるが、バガスや葉などソフトセルロースの利用に研究開発の力点は移りつつある。将来的には熱化学的な熱分解ガスからのアルコール合成が目目されている。このような技術動向とEPAなど政治経済的な流れも勘案しながら、夢のあるサトウキビ像を描きたい。

バイオマスにはバイオエタノールだけではなく、他にも様々な利用法がある。BDF（バイオディーゼル燃料）製造に向けてヤトルファ（ナンヨウアブラギリ）栽培などに関する動きも活発化している。このような資源作物の栽培を農業活性化につなげられないか？最も期待されるのは畜産排泄物の有効利用である。畜産の専門化に伴って畜糞類はやっかいな廃棄物になってしまった。これまでもたびたび耕畜連携が謳われてきたが、実効ある対策にはなりえなかった。「バイオマス」という新しい光と「温暖化対策」をベースに、効果的な処理法と施用技術を確立すれば、これは沖縄農業にとって大きな恵みをもたらす可能性がある。それには地域全体で有効利用に取り組む「バイオマスタウン」がキーワードである。温暖化対策と農業活性化さらには地域振興のかなめとしてバイオマスを活用したいものである。